
たった1日の友達

twilight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たった1日の友達

【Nコード】

N4060V

【作者名】

tWillinght

【あらすじ】

小学3年生の海は、夏休みに遊びに行く途中におじさんから幽霊をレンタルしないかと誘われる。話を聞くうちに、レンという同じ3年生の幽霊を1日借りるようになる。

そして、彼ら2人の運命は…。

(前書き)

「空想科学祭2011」のRED部門、参加作品です。
よろしくお願ひします。

「その君、幽霊のレンタルをしてみないかい？」

ある夏休みの朝、歩いてプールに行こうとしている僕に対してそのおじさんはそう話しかけてきた。

「レンタル？ぼく、お金もってないし、そもそもまだ小学3年生だよ？」

「大丈夫大丈夫。1日100円だし、親の許可もいらないよ。ちよつと質問なんだけど、誕生日っていつだい？」

ぼくには、おじさんがその答えを楽しみに待っているように見えた。

「8月6日だよ。」

ちなみに今日は8月5日だから、明日が誕生日。楽しみだ。

ぼくが誕生日を答えると、やっぱりと言う顔で喜び、

「8月6日なら、ちよつどレンタルをしてもらおうと思っていた子と誕生日が一緒じゃないか。これはサービスな きゃね。」

そう言っつて、おじさんは小型の機械を取り出して、2つ3つほどキーを押した。

すると、おじさんのとなりにぼくと同じくらいの子供が出てきた。

「うわっ。」

ぼくは驚いてしりもちをついてしまった。

「大丈夫かい？」

そう言っつて、おじさんは大きな手をさしだしてくれた。

「ありがとう。」

ぼくはお礼を言っつてその手を握り、立ち上がった。

その後、おじさんは隣に出てきた男の子について説明してくれた。

「この子は君と同じ小学三年生の幽霊だよ。」

今日1日サービスで貸し出しをするから、仲良くしてあげてね。」

「わかった。」

ぼくはそう返事をして、その幽霊の子のほうに話しかけた。

「はじめまして。ぼく、海^{かい}っていうんだ。君は？」

「…えーと、ぼくの名前は…。」

「忘れちゃったの？」

「え？…そ、そうなんだよ。だから…えーと、レンって呼んで。」

「わかった。じゃあレン、行こっか。」

「うん。」

「えーと、今からプールに行くんだけど、いい？」

「いいよ。つれていって。」

「わかった。」

そう言っつて、ぼくは歩き出した。その後ろをレンがついてくる。体は浮いてるけど。

そういえば、いつの間にかおじさんはきえちゃったみたい。なんでだろ？

「はぁ、おこられちゃったよ。」

「海、ごめんね。」

「いいよいいよ。レンは悪くないよ。」

最初は、一人で泳いでいたんだけど、となりでレンがさびしそうにしてるのをみて、

レンに水をかけて遊んでいた。

でも、他の人にはレンはみえないみたいで、一人で水をだして遊んでいるって係の人に

おこられちゃったんだ。

「そろそろ12時じゃない？」

レンが言っつて、ぼくもそれに気づく。

「本当だ。早く家に帰らなきゃ。レン、走ろう。」

ぼくは、そういっつて走り始める。

「あ、まってよ〜。」

とっつて、レンが追いかけてくる。

この鬼ごっこは家の前まで続いた。

「ただいま。」

ぼくはそう言っただけで台所へ向かう。レンも後ろをついてきた。

「今日のご飯は何？」

ぼくがそう聞くと、「そうめんだよ。リビングでまってるさ。」
というお母さんの声がかえってきた。

そうめんかあとと思って、後ろを見ると、レンがお母さんの方をじっと見ていた。

「レン？」

ぼくはつぶやいた。

「あ…ど、どうしたの？」

「今、ぼくのお母さんのほうを見てなかった？」

ぼくはお母さんに聞こえないぐらいの声で話す。

「そ、そんなことないよ。」

レンはそう言っただけで首を大きく振って、ぼくの後ろについてきた。

ご飯を食べ終わったら、宿題をやらなきゃいけない。

ぼくは、自分の部屋で宿題をやっていた。

「この問題わかる？」と僕が聞くと、

「わかんない。社会苦手だから。」と、レンは言った。

「同じだね。ぼくも社会苦手。」

ぼくは、なんかうれしくなってハイタッチをしようとする。手をすり抜けちゃうんだけどね。

レンもハイタッチしてくれる。その顔は、ぼくと同じで笑顔だった。でも、何かレンの笑いが不自然な気がするのってなんなのかな？

(宿題が終わったなら、次は何をして遊ぼうかな。せつかくレンが
いられるのも今日までだし。) と思って、レンに何をして、遊びた
いかを聞いた。

「えーと、サッカーは？」

「いいね。そうしよっか。」

そう言っつて、下に向かおうとするとお母さんが

「海、ちょっとおつかいをお願いしてもいい？」と言った。

ぼくはレンの顔を見た。レンはとても困ったような顔をしていた。

それをぼくは、遊びたいんだろうなと思って、

「いや、これからサッカーをしにいくから。」

と言った。でも、

「わがまま言っつてると今日のご飯なしだよ！」

と怒られてしまったので、ぼくはレンに、ごめんねと目くばせして、

「わかった。」と言っつて、お金とかばんをうけとった。

それからというもののレンはずっとそわそわしていた。

まるでいつボールがとんできて危ない目に合うのかと怯えているよ
うだった。

「レン、大丈夫？」

「う、うん。大丈夫だよ。」

でも、本人に大丈夫と言われてしまったので、それ以上は聞けな
かった。

そう言っつて、スーパーまで後2、3分というところでレンがとま
った。

レンは実体のないその身体をふるわしていた。

「ね、ねえ。ちょっと、遠回りしない？」

レンが慌てて言う。

ぼくは、この場所がレンは嫌いなのかな？ と思っつて、

「いいよ。」と言っつと、レンは安心したような顔をした。

しかし、道を曲がると…工事中だった。

「おい、その坊主。こゝは通れないぞ。」
と工事をしていたおじさんが教えてくれる。

「わかりました。ありがとうございます。」

ぼくはそう返事をして、軽くお辞儀をして、レンの方を見た。

レンはすごく驚いたような…その中になにか別の感情がはいつているように見える顔をしていた。

「レン、どうしたの？」

ぼくは心配になって、声をかけた。

だけど、レンはぼくの声も聞こえてないみたいで顔を伏せて、何かをつぶやいていた。

「レン！レンってば！」

ぼくは、周りの目も気にせずに叫んでしまった。

なぜかは、わからなかった。

あえていうなら、そのままレンが消えてしまいそうな気がしたからかもしれない。

「あ、ごめん。」

そう言つて、レンはあやまってくれた。

顔色ももとに戻っていた。

「いや、いいよ。ぼくも大声をだしてごめん。」

この時、ぼくは周りを気にせずに話していた。

さっきの感覚から、今大事なのはレンと話すことだと思っていた、それが当たり前とも。

(でも、ぼくは気づくのが遅いせいで、約束の1日の殆どは過ぎてしまった。でも、今からでも大丈夫。)

そう、海が決意した時、皮肉なことにレンの顔は蒼白となっていた。

「海、危ない！」

ぼくが気づいた時にはトラックが目の前にいた。

ブレーキを欠けているけど、間に合わないことはぼくにもわかった。

ぼくは、逃げられなかった。

まるで、ここにいたことが当たり前のように。
そして、ぼくは見てしまった。レンがトラックを止めようとぼくの前に立っていることに。
けれど、レンには実体がない。トラックはレンをすり抜け、僕にぶつかる。

その時に見た、レンの顔は…泣いていた。
そして、ぼくの意識は消えてしまった。

「君が海くん、いや、”元”海くんかな？」
聞き覚えのあり、見覚えもある。

しかし少しだけぼくが知っている人とは違うおじさんがいた。
そして、意識がはつきりしてくると、頭の中にたくさんの物事が流れこんでくるような感じがした。

「!?!」

「大丈夫かい？」

ぼくの表情にも、驚いたようなような行動は見せずに、話しかけてくる。

すこし、時間が経つと頭の中が整理されてきた。

「はい…。すべてを思い出した…。いや、理解しました。

ぼくがやるべきことも。そして、彼のことも。」

おじさんは納得したように笑って、立ち上がる。

「じゃあ、彼のところへ行こうか。きっとこのあたりにいるはずだ。」

ぼくは、おじさんについていく。

少し進んだ後、おじさんが思いだしたように言った。

「そう言えば、君の名前について話してなかったね。ここでの君の名前は…。」

ぼくはその名前を聞いて、つい、微笑んでしまった。
まるで、僕の中に彼がいるよう な気がしたから。

(後書き)

追記

文字数が足りないとのこと指摘を受けて、加筆修正をかけました。流れが唐突かな？とおもっていた最後の部分を中心に編集しました。

この作品は、もともと自分の中の制約でルーズリーフの表裏1枚で書き上げようと思っていた作品でした。

その制約の関係でぎりぎり足りないという自体になってしまったみたいです。

ただ、それに気づけなかった僕が問題でした。すいませんでした。

感想及び評価のほうも可能でしたらよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4060v/>

たった1日の友達

2011年8月3日18時00分発行